

古書のたのしみ 令和元年八月（坤）

土屋 博

十「漢文新編 卷四、卷五」東京帝國大學文學部教授文學博士鹽谷溫編

（台名會社弘道館藏版、大正十一年刊、定價金四拾貳錢、四拾參錢、各一八〇頁）

古書價格各三百圓也。永らく探し求め居りし卷四を遂に發見したる喜びに浸る。卷四の構成は、内篇名家文鈔（重野安禪の霞關臨幸記、鹽谷世弘の遊墨水記、賴襄の北条時宗論、蒙古來、楠氏論、耶馬溪圖卷記など）、外篇史記鈔なり。

十一「薩摩琵琶 愛吟鍊磨集 上卷」琵琶歌研究會編纂

（東京岡村書店藏版、大正十三年刊、定價金五十錢、一二二頁）

古書價格三百圓也。通常相場の高きものなれば、迷ひなく購入す。金剛石（金剛石も磨かざば玉の光は添はざらむ……）、春日野（春日野に下萌え出づる若草の……）、送別（あかねさす、わが日の本に人といふ……）、櫻井驛（世はうき雲のゆきかひてまたもや曇る五月闇……）、河内の宿（散るを習ひの櫻井の教の露に袖ぬれて……）、吉野の奥（雲井櫻の雲としも眺めし花は冬枯れて……）、俊寛（あだまもる筑紫のはての薩摩潟、鬼界が島の荒磯に……）など。

十二「新修漢文 簡野道明編 卷一」

（明治書院、大正十五年訂正版、臨時定價金五拾參錢、一二二頁）

古書價格二百圓也。初版は大正十四年。冒頭の句例は、「花開く。鳥啼く。花開き鳥啼く。梅花開き黃鳥啼く。」也。藤田彪（東湖）の「日域の三絶」は、以下の如し。「日出之域は、萬國に冠絶す。其の神秀を鍾むるは、富嶽也。其の英華を發するは、櫻花也。其の精氣を蘊むは寶劍也」と。

十三「擬古文類選」東京開成館編輯所編

（東京開成館藏版、昭和六年刊、定價金七拾錢、本文一八八頁、附録二八頁）

古書價格二百圓也。鈴屋集より櫻花詞、玉勝間より花のさだめ、花月草紙より花、益軒文集より櫻のほころび出でたるこそなど。

十四「いてふ本 古事記」

（三教書院、昭和十年刊、定價金五拾錢、一九八頁）

古書價格二百圓也。天照大御神、忌服屋に坐しまして、神御衣織らしめ給ふ時に、その服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剝に剝ぎて、墮し入るゝ時に、天の御衣織女、見驚きて、梭に陰上を衝きて、死せき。故於是、天照大御神、見畏みて、天の石屋戸を閉て、刺し隠りましましき。」と。

十五「愛國百人一首評釋」齋藤瀏著

（抜刷、二〇頁）

古書價格二百圓也。愛國百人一首は文學報國會と東京日日新聞、情報局の後援を得て選定したるもの也。著者齋藤瀏りゅう(一八七九年生れ、日本陸軍軍人、歌人。長女は歌人齋藤史)は選定委員十二名のうちの一人なり。

十六「日本の偉人」菊池寛著

(東南書房、昭和二十七年刊、都内定價一八〇圓、地方定價一九〇圓、三二六頁)

古書價格二百圓也。前書きより、『支那の淮南子といふ本の中に、萬人に秀れたるを英といひ、千人に秀れたるを俊といひ、百人に秀れたるを豪といひ、十人に秀れたるを傑といふと書いてある』と。本書にては、その人が居なかつたら外に其の人の代りにした人はあるまいと思はれる人物、選定せらる。聖徳太子、藤原鎌足、光明皇后、空海、紫式部、源頼朝、北条時宗、楠木正成、北畑親房、雪舟、上杉謙信、豊臣秀吉、徳川家康、宮本武藏、松尾芭蕉、徳川光圀、塙保己一、本居宣長、關孝和と本多利明、伊能忠敬、頼山陽、吉田松陰、野村望東尼、大久保利通と西郷隆盛、福澤諭吉、伊藤博文。

菊池寛は名著「日本英雄傳」シリーズの編集者の一人なれば、いはば偉人傳の類の専門家なれば、本書を書く適任者なり。

十七「史傳 頼山陽」安藤英男著

(大陸書房、昭和四十八年刊、定價八百圓、二七〇頁)

古書價格三百圓也。二度目の購入。

十八「日本漢文學史」猪口篤志著

(角川書店、昭和五十九年刊、定價六千九百圓、六九一頁)

古書價格二千圓也。今年の東横百貨店古本市の唯一の收穫なり。著者は大正四年熊本生れ、昭和十四年大東文化學院高等科卒業、大東文化大學教授。大東文化學院は大正十二年設立。本科三年課程と高等科三年課程より成る。全學生は國庫補助により授業料免除。初代總長は平沼騏一郎。

十九「頭書 古今和歌集遠鏡」本居宣長著

(出版社、出版時期不明)

古書價格三百圓也。平凡社の東洋文庫にも収録せられたる模様なれど、こは文庫版なれば購入す。

(令和元年七月二十二日受附)